

活動名 日本遺産キリコ祭りのスポーツ人類学的研究

団体名 大森フィールド基礎

代表者名 大森重宜

はじめに(背景・目的・目標)

日本の祭りを身体運動文化 (Physical Arts) と捉え、日本遺産「キリコ祭り」を対象として、フィールドワークを行い、身体運動文化としての祭りの本質を探究することを試みた。

キリコ祭りには能登半島の 200 ヶ所で 900 基が担ぎ出される。キリコ祭は神霊を招きキリコの奉納と担ぎ手の狂喜乱舞をもって饗応することにより神威を高め、五穀豊穡また海の安全と大漁、あるいは水を介する流行り病への防疫などを祈願する祭りである。1 基ごとに 20 人から 100 人で最大 15m、2t のキリコを担ぎ昇り廻る時、その激しさ、厳しさゆえに連帯感と陶酔をもたらす。キリコ祭りは能登の人々にとって独自の民族的身体運動文化であると考えられよう。

活動内容

大森フィールドは、平成 22 年より継続的に石崎町東一区のフィールドワークの一環として奉燈 (キリコ) 担ぎに参加し、祭りのスポーツ人類学的研究成果も蓄積されつつある。

石崎奉燈祭の概観: 石崎奉燈祭は、8 月第 1 金曜、土曜に行われる七尾市石崎町八幡神社の納涼祭、大漁祈願祭で、明治期まで山車祭りが行われてきたが、大火により中断した。奉燈 (切子燈籠) は 1889 (明治 29) 年、網大工の漁業つながりからキリコ発祥とされる能登の能登町宇出津のあばれ祭りから現在の奉燈の原形が移入された。また、七尾市内に電線が架設され七尾祇園祭の奉燈が担ぎ出されなくなり、石崎に伝わったケースもある。この地域独自の奉燈文化が生まれ、能登の代表的勇壮華麗な祭りとなった。奉燈の数は大奉燈 7 基、重さ約 2 t、同幅約 2.5 m、高さ約 12~15m、長さ (担ぎ棒) 約 9m を約 100 人で担ぐ。祭は納涼、大漁祈願のほか、鎮火の神事でもあり、この意味からキリコではなく「奉燈」と称している。

8 月 4 日午前中の奉燈清祓式、安全祈願祭に参列し、神事としての側面を体験。さらに町会の人々および手伝い (テツタイ) の人々との親交を持つことにより、その組織について理解することにつとめた。キリコ祭りの基となる労働における互酬「結」では「手伝いは手弁当」が不文律である。可能な限り東一区町会に負担をかける事無く参加することに心がけた。午後 1 時より東 1 区を出発、町内を担ぎ巡り、その後神輿の御旅所堂前広場まで 4 時間をかけて巡行。その後、町会長をはじめ各家々よりでの祭御馳走 (ゴツオ) の招待の申し出を受けるが、不作法ながら帰路についた。

成果、結果の考察と今後の課題、展望

石崎にはグマインシャフトと言うべき漁業を中心とした特異な地域文化が形成され、奉燈祭はその象徴として人々に受け継がれ民族的祭りとなった。キリコ祭りの維持継承には血縁、地縁、社縁による担ぎ手の確保が共通の課題であり、隆昌、中断・消滅の主原因となる。ここに学生などの「無縁」者が参加する事は功罪でもある。つまり祭りの意義である「アイデンティティの確認欲求」と「集団集約」の機能を壊す可能性がある。勇壮であっても繊細な祭りの学生としての手伝いは、神賑 (楽しみ) を共有する「合衆縁」の成立が重要となろう。個人として継続的に縁をつくることが必要となる。

